

1. 単 元 水泳
2. 研究主題との関連

身体と対話する学びを自分化する指導法の改善

～子どもたちが自ら学んでいるという実感をもちながら思考・判断と技能を高める授業～

(1) 単元について

6年生の子どもたちはこれまでに『浮く・泳ぐ』運動について次のような経験をしている。フラフープやウレタンマット、ビート板などの、もぐる・くぐる・あおむけ・うつ伏せなど「浮き」につながる動きや姿勢を引き出す用具を用意し、楽しく水との関りを豊かにしていく水遊び(低学年)、クロール(3年)及び平泳ぎ(4年)を25m以上泳ぐことをめあてに水泳技術の課題(手、足、息つぎ、コンビネーション)を練習していく水泳、既習の学習をもとにクロール、平泳ぎを100m以上の距離を泳げるようにする水泳(5年)である。

6年生での水泳は、動きのポイントを的確につかんで見合い教え合いを重ね、合理的な動きを身につけ余裕をもって200mを泳ぐことができるようにすることが目標である。クロールはストロークや息つぎが、平泳ぎはストロークとキック、コンビネーションが学習の中心となるであろう。子どもたちには泳いでいるときの身体の感じ方を意識させたい。これまでどの感じ方とどのように違うかを意識することで合理的な動きを体感するであろう。教えている児童には、めあてをもって見ているか、どの位置で見るのが適切かを指導者が適時言葉かけを行い円滑な教え合い活動が進むようにする。

子どもたちは泳力異質の3人バディで学習していくことにする。泳ぎが得意でない子どもでも、相手の動きがどのようなかは伝えることができる。また、泳ぎが得意な子どもは自分の経験を生かして、技術的なアドバイスができる。このときにアドバイスする子は見た様子とともに自分の体感を呼び戻してアドバイスをするのである。3人バディの中では、自分の課題を試したものをすぐに見てもらってアドバイスをもらい、さらにもう一度チャレンジしてみるというサイクルがどんどん促進していく。同時に、自分の動きの感じに対して即時にアドバイスをもらうことができる。このように「自立」して学習を進められるトリオをつくっていくことで、より効果的な学習効果が得られるであろう。

(2) 単元の目標

見通しをもって、協力して活動に取り組もうとする。【学ぶ態度】

バディの特徴に合った教え合いをし、めあてにあった動きを工夫する。【思考・判断】

合理的な動きを身につけ200mを泳ぐことができる。【技能】

(3) 活動構成の仮説

子どもの育ちを生かした活動構成

1時間の授業の前半は泳力異質の3人バディでの学習を進めていく。既習のクロールや平泳ぎは合理的な動きを身につけ、余裕をもって長い距離を泳ぐことができるようにする。授業の後半はプールを縦に使うためし泳ぎを行う。ここで3人バディでの学習の成果を試すことになる。3人バディで得た自分で見る視点、感じる視点を生かして泳いでいく。単元後半には技能や思考・判断の高まりが期待できるため、徐々に縦で使用する時間をふやしていくことにする。試しの泳ぎで得た課題が次時の3人バディでの課題となる。このようにバディとためしの泳ぎが相互に作用するような活動構成をする。

身体との対話をうながす指導者のはたらきかけ

まず、【学ぶ態度】に対しては、一人一人が学習計画を把握し、見通しをもって学習を進めていくことをねらいとし、子どもたちが自分自身の現状や課題を理解し、課題を達成するまで見通しがもてるような支援をしていく。【思考・判断】に対しては、子どもたちが3人バディそれぞれのめあてを確認したうえで課題にあった練習方法を選択することをねらいとし、お互いを見る位置や視点を意識させながら支援していく。【技能】に対しては、3人バディでの教え合いを中心としながらも、状況に応じて個別指導を取り入れ、単元を通して基本的な技能が高まるように支援していく。また、体感に基づく技能の高まりが得られるような言葉かけも随時行うことにする。